

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.13

台湾妄想旅行現実 ver 姉妹旅行記 森岡小晴・万釉

妹・森岡万釉「初海外旅行記—感想を添えて」

<1日目>

「夜市」

台湾行きの飛行機内がレインボー🌈に光っていて新鮮だった。

空港には、「温泉＝健康的幸福 40度」と書かれた温泉のポスターなど様々な看板があり、意味がなんとなく分かるから面白い。

道路でバイク競争みたいに信号待ちしていて迫力があつた。(写真：1)

夜市のフルーツ飴は日本より値段が安く買いやすかつた。

お祭りにあるような射的や輪投げなどの屋台が数多くあり、日本だとあまり客がないイメージお客さんも賑わつてた。これを毎日していると思うと不思議な感覚になる。(写真：2)

台湾初日に食べた豆花(写真：3)とマンゴーかき氷は見た目も味も良くて最高だった。

日本のレトロ店みたいな場所があつて面白い。(写真：4)

胡椒もちちは激アツで、八角の味がした。私はあまり得意ではなかつたが、生地のもちもち感はとても好きだった(肉まんみたい)。

夜市にいる時に、両親とzoomをして、日本にいる両親と台湾にいる姉妹での会話は不思議な感覚で、通信技術は凄いなと感じた。



①



②



③



④

<2日目>

駅内にあつたミスドは9割ボンデリングで、すごい種類だつたし全部美味しそつた。台湾では何個買つたら1.2個プレゼントのお店が多く、ミスドもそのひとつだつた。(写真：5)

途中で入つたパン屋では店員さんの1番のおすすめを買つたが、シナモンの味がキツく、私好みではなかつた。見た目は可愛かつた。

2日目も十份でマンゴーを食べた。すごくジューシーで美味しかつた。焼烤雞翅包飯というスパイシーな鳥飯も美味しかつた。

ランタンには、4面に3人でコメントを書き、飛ばしたのが新鮮で楽しかつた。大きくて驚いた。(写真：6)

その後飲んだレモンジュースはさっぱりとした味で美味しかつた。飲み物の量は基本的に全部多いし、飲みごたえ抜群。

オカリナ屋さんに行つて各自オカリナを買つた。大きさも沢山あつて、種類も豊富だつたし、全部可愛かつた。お店の店員さんもすごく気さくな方で、フレンドリーだつた。オカリナをずっと吹いていたが、日本の曲も多くあり、おしゃべりもした。楽しかつた。(写真：5)

九份に着き、存分に千と千尋の世界感に浸かった。(写真：7)
万籟の名前の文字デコレーションもしてもらった。(写真：8)
この日も夜市に行き、沢山食べた。

豆花や巨大なダージーパイを食べた。ダージーパイは顔2個分の大きさに凄くジューシーだった。



⑤



⑥



⑦



⑧

<3日目>

宮原眼科に行った。すごい高級感あふれる店内。そこで買ったアイスクリームは値段は高めだが、すごいボリュームでとても美味しかった。味もトッピングも自由に選ぶことができる。台湾に旅行で行った人はみんな食べるべきだと思うくらい。

彩虹春村に行った。ここは不思議な世界観。どこをみてもカラフルな絵に囲まれている。独特で可愛いいろんなイラストがある。

コンビニに入ってチーズまんを買った。マックに行ってさつまいもスティックを買った。両方とも日本にはない商品でとても美味しかった。日本にも売って欲しい。

3日目も夜市に行った。フルーツとタピオカが入っているジュースを買った。さっぱりとしていてすごく美味しい。量の割に値段が安い。

夜市の中で大好きなさつまいもボール。(写真：9) これほんとに美味しくて、また食べたい。ここでさつまいもボールとチャーハンとモダン焼きみたいな物とピーナッツアイスとジャンボおにぎりを買った。中華のお店の看板は、チャーハンが日本語で(チャーはそ)になっていて面白かった。これ以外にも日本語の表記は沢山あった。たまに間違えていたのもすごく親しみを感じた。

ジャンボおにぎりは本当に大きくて、中に揚げパンが入っている。不思議なおにぎり。でも中にいろんな具材が入っていて美味しい。目の前で作ってくれるから見ていても面白いし出来立てで激アツだった。

<4日目>

台湾のスタバに行ってみたかったので私の朝ごはんはスタバのパン。めっちゃ美味しかった。日本よりもパンの種類が豊富。値段は日本のスタバと同じくらい。お姉ちゃんは道で売っていた、台湾クレープ「潤餅(ルンピン)」を買っていた。=台湾の街角でみかける朝ごはん。野菜たっぷり。

その後 101 に行った。インスタ映えスポットが沢山あった。天気にも恵まれ、最高の景色だった。お昼ご飯にチゲ鍋を食べ、タピオカを飲み、中華街のような場所に行き、小籠包を食べた。ここの小籠包はジューシーでめっちゃ美味しい。今日もさつまいもボールを食べた。見た目も可愛い。作り方も面白い。豆花も2人で食べた。最後に明日の朝用のパンを買ってホテルに戻り就寝。

泊まったホテルは私と姉の2段ベットの小さな部屋で、
快適に寝られるよう試行錯誤して乗り切った。なんだかんだ楽しかった。
毎日色々な観光地に行き、沢山の飯やスイーツを食べて幸せだった。
私にとっての初海外。全部が全部楽しかった。

⑨





姉・森岡小晴「旅で感じたこと—台湾大好き！」

私はいつも、揺らぎながらも“揺るがないもの”を持つ人間でありたいと思う。そしてそのために、新しい文化や沢山の人の、暮らしに触れる中で、知らなかった価値観を得ることが好きだ。そのためなら、結構フツ軽で視野を広げるための労力は惜しまない。なんて言いながら、ただ今の自分の価値観に自信などなく、新しい世界や考え方から学ぶのが好きなのだ。

台湾に行くきっかけも同様の理由である。大学 2 年の頃、海外への足掛かりとして高校の台湾派遣プログラムに参加したのだが、あいにくその年はコロナで現地に伺うことが叶わなかった。そして、また台湾に行きたいという思いを温め 2 年が過ぎ、5 月の小菅むらまつりキャンプで、佐伯さんから台湾の妄想旅行記を実現させるのはどうかというお誘いを頂いた。このような経緯と佐伯さんのありがたすぎる迅速な計画のもと、教員採用試験など挟みながら、ドタバタと今回の妄想旅行→現実 ver が実現したのである。

4 泊 5 日で私たちは、台北を中心として、九份の街歩きや十份のランタンなど歴史の残る街歩き、101 タワー等の都市部観光、「台湾の原宿」西門で買い物、3 日目には新幹線で台中へ行き、日本時代の建物でアイスを食べたり、カラフルに絵が描かれた軍事基地の跡地を見て回った。また、終始、夜市や道路沿いに出ている屋台、日本にもあるファストフード店の台湾版など、目についた食べ物、お腹の許さない程度に食べまくった。全ての街並みは新鮮で、どこを歩いていても楽しくて、拙い語彙力と出川イングリッシュを現地の方に発動させる緊張感が面白くて、海外のバックパッカーズホステルの狭いけれど意外としっかり睡眠を取ることができた部屋は、大学生の旅として必要十分な QOL を確保することができた（プランして下さった佐伯さんありがとうございました！）。

旅の中身については妹が紹介してくれているので、私を感じた台湾を表すと、「他人という壁がない台湾の人々、屋台が並び、暮らしの色で溢れている街並み」だ。そして、それを象徴しているのが台湾の夜市である。夜市では、屋間はただの道路だった道沿いに、当たり前のように沢山の屋台が出ていて、チャーハンを頬張る学生がいれば、1 人でサクッと夕飯を食べ帰っていく大人、子連れの家族、観光客など沢山の人がいる。色々な人の暮らしの中に屋台があって、それはど

こか、日本の廃れてしまう前の商店街と通するものがある気がした。誰が来ても歓迎してくれるような“welcome”というよりはもっと、居ることが特別でないかのような空間で、いきなり初対面の壁を一個取っ払った、定食屋のおばちゃん×（かける）店の数みたいな感じたなと思った。全ての店ではないが、お客と店員という無機質な関係をもう少し超えて、「今日もご飯食べに来たよ」と言いたくなるような、人の温かみと日常に色を添えてくれる気がした。

詳しく話すのは恥ずかしいので割愛するが、私は旅の途中で落とし物をして現地の警官のお世話になった。その時に、温かいほうじ茶を入れ、旅の楽しい思い出や他愛のない雑談に付き合いながら、拙い英語をくみ取り、警察署のネットワークで電話とバイクを走らせ、素早く落とし物を見つけ渡してくれた。それも、とても素敵な笑顔で。親切をする側が、笑顔を向ける義理などないかもしれない。けれど、別れ際まで笑顔が素敵なあの時の方々への感謝とリスペクトは止むに止まないし、そういう人間でありたいと私は思った。

旅を終えて 10 月、私は高校の教育実習の地理総合「生活文化の多様性」の教材として「台湾の文化」を取り上げて授業を行った。自分が実際に見た世界を伝えることは難しかったけれど、生徒にはいつもよりも響いた気がして嬉しかった。授業の中で生徒たちは、「それぞれの国の文化が残るのは、環境的な要因もあるし、その地の人々に愛され传承されてきたからだと思う」といった感想や、文化の均質化（マクドナルド化）が広がる世界において、「私たちは、他の文化を排除したり受け入れたりするのではなく、知ろうとすることが大事だと思う」といったまとめを行っていた。

日本で震災が起きて、台湾がいち早く支援をしてくれた時、旅の途中で「日本人ですね！」と好意的に話してくれる台湾の方々に出会った時、私は台湾について、日本との歴史における関わり方など文化的背景をあまりに知らなかったことを改めて恥じた。「日本と台湾が交わってきた時代」が、きっと台湾の人々の暮らしや街並みの中にはあって、けれど私たちの中にはあまりないのかもしれない。その温度感の違いに寂しさを感じなくなるよう、私たちは世界についてなにを知るべきなのか、もう少し考えてみたい。